

## KCELS第24回大会を終えて

### Catherine Vreeland

今年度のKCELS年次大会は2000年の直前の12月10日に開催されました。今回は英語学の担当であり、特別講演にはアイロニー研究の第一人者である大阪大学文学部教授(日本英語学会会長)の河上誓作先生をお迎えして、身近なところにある言語現象であるアイロニーの説明をとっても面白く、分かり易くしていただきました。

プログラムはお二人の卒業生で現在博士課程在学中の若き研究者によりはじまり、英文学と英語学のそれぞれの高い水準の発表をしていただきました。初期ポストモダンアイルランドの小説家フラン・オブライアンの名作をめぐって、山内千鶴子さんが複雑なテキストの神話と伝説のつながりを分かり易く説明してくれました。また、保坂華子さんは英語学習に役立つ英語のイントネーションの研究の一端をOHPとテープレコーダーを活用して、とても生き生きと説明してくれました。外国人にとっていかに英語イントネーションの学習が難しいものかを実証してくれました。

今後も若き学者の発表の場および第一線の研究者の知的交流の場として本学会が発展していくことを願っています。

最後に、来年度はKCELS25周年を迎えるとともに、神戸女学院125周年が重なるため、年次大会は特別企画として計画したいと思います。たとえば、50人目の卒業生発表者にあたるので発表者のコンテストをするなど、皆様のご援助とご支援を今後とも賜りますようお願いいたします。

## ■特別講演(要旨)

### 「アイロニーの言語学」

河上誓作

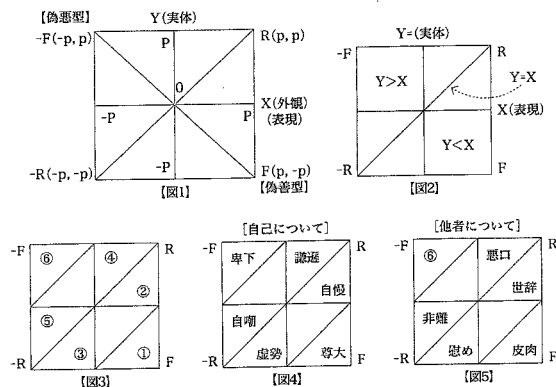
アイロニーの言語現象をどう説明するかについては、

これまで理論的に異なる視点からさまざまな試みがなされてきた。しかし、いずれの理論もアイロニーの言語現象の一部分の説明には成功しているものの、アイロニーの言語現象全体を包括的に説明する理論としては十分とはいえない。これまでの理論がいずれも失敗に終わった最大の原因は二つ考えられる。一つは、どの理論も「アイロニーの言語現象の本質部分は、言語の構造にあるのではなく、認識の構造にある」という視点を欠いていることである。もう一つの原因は、どの理論もアイロニーに必然的に伴う「外観」と「実体」の概念を理論に取り込むことに失敗している点である。これら2点を柱とした独自のアイロニー論は、これまで何度か拙論で試みられた。今回の講演はその大まかな輪郭を紹介するものである。

拙論では、事象Xの外観認識と実体認識が話者の心の中で反対関係的な偽の構造をなすとき、この複合的認識を「アイロニーの認識」と定義し、このアイロニーの認識が言語に投影されたものが「アイロニーの言語現象」とであると説明する。具体的に言うと、事象Xに関して、①「外観から判断するとpであるが、実体はその反対の-pである」、または、②「外観から判断すると-pであるが、実体はその反対のpである」の二つのタイプの認識構造がアイロニーの認識ということになる。pをpositiveな評価、-pをnegativeな評価としたとき、①を偽善型のアイロニーの認識(以下F)、②を偽悪型のアイロニーの認識(以下-F)と呼ぶ。この二つのタイプのアイロニーの認識が言語に投影される際は、外観認識が「表現内容」に投影され、実体認識がイントネーションや表情を含む「表現態度」に投影されるのが原則である。この結果、外観認識と実体認識のズレの認識(すなわち、アイロニーの認識)は、言語現象においてそれぞれ「表現内容」と「表現態度」のズレの姿に移行される



ことになり、アイロニー表現独特の「言」と「行」の対関係的アンバランスを生ずることになる。因みに、①が投影された表現を「偽善型アイロニー」(blame-by-praise型)、②が投影された表現を「偽悪型アイロニー」(praise-by-blame型)と呼ぶ。



以上の理論は、外観認識をX軸、実体認識をY軸とし、pと-pを最大・最小値とする二次元空間 [図1] に集約できる。(便宜上、[図1]は「アイロニーの認識構造図」であると同時に、「アイロニーの表現構造図」を兼ねている。) R点と-R点は実体と外観(表現)にズレがない。また、Y=X線上の点はすべて、事実表現を表す。F点と-F点は実体と外観(表現)に最大のズレが生じ、それぞれ偽善型アイロニーと偽悪型アイロニーを示す。

[図2]のY>Xは過小表現の領域、Y<Xは過大表現の領域を示す。[図3]で①と⑥がアイロニーの領域、②から⑤がアイロニー関連語彙の領域である。日本語の調査の結果、0点をとりまく無意味な両域以外は[図4]、

[図5]のようにアイロニー関連語彙を対応させることができた。ところが、[図5]の⑥では適当な語彙が見つからず、語彙的に空であることが判明した。⑥は「皮肉」の反対語で、「他者について実体はpなのに-pという」を表す語が来るはずである。以上が拙論のごく大まかな輪郭である。講演ではできるだけ多くの実例を用い、理解しやすいように努めた。

## Swim-Two-Birdsで何が起こったか。

At Swim-Two-BirdsにおけるSwim-Two-Birdsの意味と役割

### 山内千鶴子

1939年にフラン・オブライエンによって出版された「スウィム・トゥー・バーズにて」は、奇抜で実験的な内容により評価が分かれました。ストーリーは、ある大学生が小説を書いている、その小説中の主人公、トレリスという男も小説を書いている、トレリスの書いている小説

中のオーリックという男もまた小説を書く、というものです。その上、トレリスと、彼の小説の登場人物たちは奇妙な関係を保っています。彼らは同居しており、トレリスは自分の想像から生まれた登場人物を監視します。ただし、トレリスが眠っている間だけ彼らは自由に生活することができます。しかしトレリスの監視に嫌気が差した登場人物たちは、仲間のオーリックにトレリスを主人公に彼が苦しむ小説を書くよう頼みます。オーリックが小説を書き始めると、その内容がそのままトレリスの身に降り懸かります。

このように、「スウィム・トゥー・バーズにて」は読者が認めないと成立しない世界の上に成り立っています。そして、私も今陥っているのですが、この小説を語る時、内容が分析を凌駕してしまう可能性があるのです。そこで私の発表は、これまで見落とされてきた、あるいは軽視されてきたタイトルに焦点をあてました。スウィム・トゥー・バーズとは、アイルランドの地名で、そこは文学史上「ピエラ・スウィブナ」という中世の悲劇の主人公、スウィブナが聖人の呪いを受け鳥となった我が身を嘆き、キリストに救いを求めるものの聞き入れられない場所なのです。タイトルが示すように、このスウィブナの物語はトレリスを主人公に置き換え小説の中で繰り返されるのです。

過去の物語を新しい物語に書き変える作業により、オーリックの書くトレリスの物語はただの残酷な復讐物語としてのみ読まれることを免れます。それはまた、時間的な経過が曖昧な「スウィム・トゥー・バーズにて」の中で、過去と現在をつなぐ役割にもなっているのです。

## “Foreign accent and language learners.”

### (「外国語なまり」と言語学習者)

#### 保坂華子

誰かが話しているのを聞いて、何かアクセントが違うなど感じられたことはないだろうか。特に誰かが外国語で話しているのを聞くと、大抵その言語がその話者の母語であるか否かが分かるものである。これは、一般に「外国語なまり」として知られている現象である。では、この「外国語なまり (foreign accent)」とは一体何なのであろうか？

「外国語で話す」ということは、ただ母語から他の言語に切り替えて話すというような単純な作業ではない。というのも、母語話者のspeech(L1 speech)と比べると、言語学習者のspeech(L2 speech)にはいろいろな要素が

絡んでくる。その学習者の母語 (L1)、目標言語 (target language) 両方の影響がL2 speechの特性に及んでいると考えられるし、言語的要因、発達的要因、環境的要因が絡んでいると考えられる。その結果として、コミュニケーションとしては成り立つが、同じ言語の母語話者が話すのとは何となく違って聞こえる。私は、この「何となくL1 speechとは違って聞こえる」という“foreign accent”にある程度の体系的な性質があるのではないかと考えている。

それを調べるにあたって、言語学習者のspeechの性質をイントネーションの面について考察した。日本語母語話者の日本語と英語、英語母語話者の英語と日本語を対象とし、L2 intonationをL1 intonationとtarget language intonationと比較した。イントネーションの音調パターンについて分析したところ、L2ではL1よりもパターンにばらつきが見られたものの、ある程度はL2独自のパターンが観察された。また、L2にL1でみられるパターンと類似する例もあった。「外国語なまり」的なイントネーションというのは、目標言語で不自然な音調パターンを繰り返したり、たまに使うことと大きく関係する。目標言語での音調パターンとは違った独自のパターンを使うことによって、本来イントネーションによって伝えられるべき情報の伝達や流暢性が妨げられる。「外国語なまり」として観察される現象は、言語学習者が目標言語におけるイントネーションのパターンについても模索している段階であると考えられる。

## キャンパスニュース

- \* 林和仁教授は、本年3月末にご退職され、龍谷大学文学部へ転任されます。
- \* Kristen Doherty専任講師は、本年3月末に2年間の任期を終えられます。
- \* Philip MacLellan氏は、Doherty氏後任の専任講師として、本年4月に就任されます。
- \* William Marling氏がCase Western Reserve Universityから本年4月より客員教授として就任されます。

## 国際学会発表

- \* 東森 勲氏  
スウェーデン、Stockholm大学で開催されたThe 6th International Cognitive Linguistics Conference 99 (1999年7月10-16日)にて研究発表。
- \* 三宅伸枝氏  
スペイン、Barcelona大学で開催されたThe International Association for the Study of Irish Literatures (IASIL) Conference (1999年7月26-29

日)にて研究発表。

### \* 齋藤安以子氏

東京、早稲田大学で開催されたWorld Congress of Applied Linguistics (AILA) (1999年8月1-6日)にて研究発表。

### \* 山田由美子氏

ドイツ、ハルバシュタットのグライム記念館で開催されたConnotations International Symposium (1999年8月4-8日)にて研究発表。

## 記念賞

1999年度以下の英文学科学生に対して、次の学内の記念賞が授与されました。

大沢幸恵記念賞 E97180 矢部智子

デフォレスト記念賞 E97082 久保直子

大島初枝記念賞 E97121 岡田直子、E98017 福田 彩

## 会員による出版紹介

### ◇別府恵子氏、三杉圭子氏、溝口 薫氏、C. Seton氏

『探偵小説と多元文化社会』(別府編、共著、英宝社 1999年8月刊)

### ◇風呂本惇子氏

『黒人文学入門』(共著、弓書房、2000年3月刊)

### ◇平井雅子氏

『D. H. ロレンスと新理論』(共著、国書刊行会、1999年3月刊)

『ジョージ・エリオットの時空』(共著、北星堂、2000年3月刊)

### ◇平井雅子氏、溝口薫氏、難波江和英氏

『20世紀のパラダイム』(共著、国書刊行会、2000年3月刊)

### ◇溝口薫氏

『ヴィクトリア朝——文学・文化・歴史——』(共著、英宝社 1999年11月刊)

### ◇奥本京子氏

『平和手段による紛争転換 (超越法)』(ヨハン・ガルトゥング著、翻訳、平和文化、2000年1月刊)

### ◇C. Seton氏、林和仁氏、林なおみ氏

*Power Listening II: The Story Continues with Extended Readings.* (共著、英宝社、2000年1月刊)

### ◇山田由美子氏

『逸脱の系譜』(共著、研究社 1999年5月刊)

『シェイクスピアがわかる』(共著、朝日新聞社、1999年12月刊)

*Ben Johnson and Cervantes: Tilting against Chivalric Romances.* (単著、丸善、2000年2月刊)

## 神戸女学院大学英文学会 会則

- (1) 名称  
本学会を神戸女学院大学英文学会と称する。
- (2) 目的  
本学会は本学英文学科および大学院英文学専攻卒業生の学術研究の継続と発展を奨励し、それら研究活動の発表と交流をはかり、あわせて在学生の向学研究意欲を推進することを目的とする。
- (3) 構成  
本学英文学科および大学院英文学専攻卒業生有志および本学英文学科教員を正会員とする。在学生を準会員とする。
- (4) 活動  
年一回、英文学会を開催する。  
Newsletterを発行し、会員の活動、英文学科の現況、本学英文学会その他の活動の内容を報告する。  
その他。
- (5) (a) 上記の活動運営のために運営委員会をおく。  
(b) 運営委員会は、学科長、学科会計委員と、若干名で構成されるものとする。

### 内規

- (1) 在学生を除き学会参加者は参加費500円を学会当日に納入する。
- (2) 英文学科教員は年に500円を維持費として納入する。
- (3) 維持費・参加費の徴収、及び郵送費など経費の支出は、学科の会計委員が担当する。
- (4) (3)に関しては、KCELS専用の口座を利用する。

1995年4月1日施行

### 編集後記

文学部の改革の真っ最中であり、英文学科にとっても大きな変革を迎えようとしています。このNewsletter作成にあたり、ご協力ありがとうございました。

### KCELS Newsletter 編集委員

(1999年度運営委員)

- ◇東森 勲 ◇泥谷征人 ◇平井雅子 ◇上 紀子、  
◇C. Vreeland (ABC順)

### KCELS Newsletter No. 15

編集発行 神戸女学院大学英文学会  
〒662-8505 西宮市岡田山4-1  
Tel (0798) 51-8548 Fax (0798) 51-8532